

一本のわら

楠山正雄

青空文庫

むかし、やまとのくに大和国にびんぼう貧乏なわかもの若者がありました。ひとり一人ぼっち
 で、おや つまふた親も妻もこども子供もない上に、つか使つてくれるしゅじん主人もまだあ
 りませんでした。わかもの若者はだんだんこころぼそ心細くなつたものですか
 ら、これはかんのん観音さまにねがお願いをする外ほかはないと思つて、おも長谷寺
てらという大きなお寺のお堂どうにおこもりをしました。
 「こうしておりましたは、このままあなたのお前まえでかつえ死じにに
 死しんでしまふかも知れしません。あなたのお力ちからでどうにかなるもの
 でしたら、どうぞ夢ゆめでもお教おしえ下くださいまし。その夢ゆめを見みないう

ちは、死ぬまでここにこうしておこもりをしておりますから。」

こういつて、その男は観音さまの前につつ伏しました。それなり幾日たつても動こうとはしませんでした。

するとお寺の坊さんがそれを見て、

「あの若者は毎日つつ伏したきり、物も食べずにいる様子だが、あのまま置いてかつえ死にに死なれでもしたら、お寺の汚れるになる。」

とぶつぶつ口小言をいいながら、そばへ寄つて来て、

「お前はだれに使われている者だ。いったいどこで物を食べるのか。」

と聞きました。若者はとろんとした目を少しあけて、

「どうしまして、わたしのような運うんの悪いわるものは使つかつてくれる人もありません。ごらんのとおり、もう幾いく日も何なにも食たべません。せめて観音かんのんさまにおすがり申もうして、生きるとも死しぬとも、この体からだをどうにでもして頂いただこうと思おもうのです。」

といいました。坊ぼうさんたちはそこで相談そうだんして、

「困こまつたものだな。うっちゃやっておくわけにもいかない。仮かりにも観音かんのんさまに願ねがい申もうしているというのだから、せめて食たべ物ものだけはやることにしよう。」

といつて、みんなで代かわる代がわる、食たべ物ものを持もつて行いつてやりました。若わか者ものはそれをもらつて食たべながら、とうとう三七二十にちあいだおなところ一日の間、同おなところじ所ところにつつ伏ふしたまま、一いっしょうけんめい生せい懸けん命めいお祈いのりをして

いました。

いよいよ二十一日にちのおこもりをすませた明け方がたに、若者わかものはう

とうとしながら、夢ゆめを見みました。それは観音かんのんさまのまつられて

いるお帳とぼりの中から、一人ひとりのおじいさんが出てきて、

「お前まえがこの世よで運うんの悪いわるのは、みんな前まえの世よで悪いわることをした

むくいなのだ。それを思おもわないで、観音かんのんさまにぐちをいうのは

間違まちがっている。けれども観音かんのんさまはかわいそうにおぼしめして、

少しすこのことならしてやろうとおっしゃるのだ。それでとにかく早はや

くここを出でていくがいい。ここを出でたら、いちばん先さきに手てにさわ

つたものを拾ひろって、それはどんなにつまらないものでもだいじに

持もっているのだ。そうすると今いまに運うんが開ひらけてくる。さあそれでは

早く出ていくがいい。」

と追おい立たてるようにいわれたと思おもうと、ふと目めを覚さました。
 若わか者ものはそのそ起おき上あがって、いつものとおらり坊ぼうさんの所ところへ行いつて、食たべ物ものをもらつて食たべると、すぐにお寺てらを出でていきま
 した。

するとお寺てらの大おお門もんをまたぐひようしに、若わか者ものはひよいとけ
 つままずいいて、前まえへのめりまりました。そしてころんだはずみに、見み
 と、路みちの上うに落おちていた一本ほんのわらわを、思おもわず手てにつかんでいま
 した。

若わか者ものは、

「何なんだわわらか。」

といつて、つい捨てようとしたが、さっきの夢に、「手にさわったものは何でもだいに持つておれ。」といわれたことをおもい出して、これも観音さまのおさずけものかも知れないと思つて、手の中でおもちやにしながら持つていきました。

二

しばらく行くと、どこからかあぶが一匹飛んできて、ぶんぶんうるさく顔のまわりを飛び回りました。若者はそばにある木の枝を折つて、はらいのけはらいのけして歩いていましたが、あぶはやはりどこまでもぶんぶん、ぶんぶん、うるさくつきまとつて

きました。若者わかものはがまんができなくなつて、とうとうあぶをつかまえて、さつきのわらでおなかをしばつて、木の枝えだの先さきへくくりつけて持つていきました。あぶはもう逃にげることができなくなつて、羽はねばかりあいかわらずぶんぶんやつていました。

すると向むこうから、身み分ぶんのあるらしい様よう子すをした女おんなの人が、牛う車くるまに乗のつて長谷寺はせでらへおまいりにやつて来きました。

その車くるまには小ちいさな男おとこの子こが乗のつていました。男おとこの子こは車くるまのみすを肩かたにかついで、たいくつそうにきよろきよろ外そとのけしきをながめていました。すると若わか者ものが木きの枝えだの先さきにぶんぶんいうものをつけて持つて来くるのを見みて、ほしくなりました。そこで男おとこの子こは、

「あれをおくれよ。あれをおくれよ。」

と、馬うまに乗のつてお供ともについている侍さむらいにいいました。

侍さむらいは若者わかものに向むかつて、

「若わかさまがそのぶんぶんいうものをほしいとおっしゃるから、気きの毒どくだがさし上あげてくれないか。」

と頼たのみました。若者わかものは、

「これはせつかく仏ほとけさまからいただいたものですが、そんなにはしいとおっしゃるなら、お上あげ申もうしましょう。」

といつて、すなおにあぶのついた枝えだを渡わたしました。車くるまの中の女をんなの人はそれを見みて、

「まあ、それはお気きの毒どくですね。ではその代かわりに、これを上あげましょう。のどがかわいたでしょう、お上あがりといつて、上あげて

おくれ。」

といつて、大きな、いいにおいのするみかんを三つ、りっぱな紙かみにのせて、お供ともさむらいわたの侍に渡しました。

若者わかものはそれをもらつて、

「おやおや、一本ほんのわらが大きなみかん三つになつた。」

とよろこびながら、それを木の枝えだにむすびつけて、肩かたにかついでいきました。

三

するとまた向むこうから一つ、女おんな車くるまが来きました。こんどは前まえ

のよりもいつそう身分みぶんの高いたか人が、おしのびでおまいりに来たきも
 のとみえて、大ぜいおおの侍さむらいや、召使めしつかいの女などがお供ともについて
 ました。するとそのお供ともの女ひとりの一人が、すっかり歩きあるくたびれて、
 「もう一ひとあし足あるも歩けません。ああ、のどがかわく。水みずが飲のみたい
 。」

といいながら、真まつ青さおな顔かおをして往來おうらいに倒たおれかかりました。
 侍さむらいたちはびつくりして、どこかに水みずはないかとあわてて探さがし回まわり
 ましたが、そこらには井戸いどもなし、流れながもありませんでした。そ
 こへ若者わかものがのそのそ通とおりかかりますと、みんなは、
 「もし、もし、お前まえさん、この近所きんじよに水みずの出る所でを知しりませ
 んか。」

とたずねました。若者わかものは、

「そうですね。まあこの辺へん、五町ちようのうちには清水しみずのわいている所ところはないでしょうが、いったいどうなさったのです。」

と聞ききました。

「ほら、あのとおり歩きあるくたびれて、暑あつさに当あたつて、水みずをほしがって死しにそうになっている人があるのです。」

「おやおや、それはお氣きの毒どくですね。ではさしあたりこれでも召めし上あがってはいかがでしょう。」

若者わかものはそういつて、みかんを三つとも出だしてやりました。みんなは大たいそうよろこんで、さつそくみかんをむいて、病びよう人にんの女にその汁しるを吸すわせました。すると女はやつと元氣げんきがついて、

「まあ、わたしはどうしたというのでしよう。」

といいながら、そこらを見回みまわしました。みんなは水みずがなくなつて困こまつていたところへ、往おうらい来の男がみかんをくれたので助たすかつたことを話はなしますと、女はよろこんで、

「もしこの人がいなくなつたら、わたしはこの野原のはらの上で死しんでしまふところでしたね。」

といって、真まつ白しろな上じょうとう等ぬのな布さんたんを三さん反たん出して、

「どんなお礼れいでもして上げたいところだけれど、途とちゆう中でどうすることもできないから、ほんのおしるしにさし上げます。」

といって、渡わたしました。

若わかもの者はそれをもらつて、

「おやおや、みかん三つが布三反になつた。」
 と、ほくほくしながら布を小わきにかかえて、また歩いて行き
 ました。

四

その明くる日、若者はまた昨日のようにあてもなく歩いて行
 きました。するとお昼近くなつて、向こうから大そうりっぱない
 い馬に乗つた人が、二、三人のお供を連れて、とくいらしくほか
 ぽかやつて来ました。若者はその馬を見ると、

「やあ、いい馬だなあ、ああいうのが千両馬というのだろう

。一

と、思おもわひとごとずこと独ひとり言ことをいいながら、馬うまをなながめめていまいました。する
 と馬うまは若わか者ものの前まえまで来きて、ふふいにばたつたたり倒たおれて、そのまままそ
 こで死しんでしましまいました。乗のつていいる主しゅ人じんもお供ともの家来けらいたちも、
 真まつ青さおになりなりました。馬うまのくくらをははずして、水みずを飲のましたり、な
 できすすつたり、いろいろにいたわわつていまいましましたが、馬うまはどどうして
 も生いき返かえりませせんでした。乗のり手てはががつかりして、泣なき出だしそそう
 な顔かおをしなしながら、近きん所じよの百ひやく姓しやう馬うまを借かりて、それそれに乗のつて
 しおしおと帰かえつていいきました。その後あとから、家来けらいたちが、馬うまのく
 らやくつわをははずして、つついていいきました。けれどいいくらくらい馬うま
 でも、死しんだ馬うまををかかついでいいくことことはできできないので、それそれには下げ

男なんを一人後ひとりあとに残のこして、死しんだ馬うまの始末しまつをさせることになりました。さつきからこの様子ようすを見てみいた若者わかものは、「昨日きのうは一本ほんのわらがみかん三つになり、三つのみかんが布ぬの三反たんになった。こんどは三反たんの布ぬのが馬うま一匹びきになるかも知しれない。」と思おもいながら、下男げなんのそばに近ちかづいて、

「もし、もし、その馬うまはどうしたのです。大たいそうりつばな、いい馬うまではありませんか。」

といました。下男げなんは、

「ええ、これは大金たいきんを出だして、はるばる陸奥国むつのおくにから取り寄よせた馬うまで、これまでもいろんな人がほしがって、いくらでも金かねは出だすから、ゆずってくれないかと、ずいぶんうるさく申もうし込こんでき

たものですが、殿さまが惜しがって、手放そうともなさらなかつたのです。それがひよんなことで死んでしまつて、元も子もありません。まあ、皮でもはいで、わたしがもらつて、売ろうかと思うのですが、旅の途中ではそれもできないし、そうかといってこのまま往來に捨てておくこともできないので、どうしたものでか、困つてるところです。」

といいました。若者は、

「それはお気の毒ですね。では馬はわたしが引き受けて、何とか始末して上げますから、わたしにゆずつて下さいませんか。その代わりにこれを上げましょう。」

といって、白い布を一反出しました。下男は死んだ馬が布一反

になれば、とんだもうけものだと思つて、さつそく馬と取りかえ
 つこをしました。その上、「もしか若者の気がかわつて、馬の
 死骸なんぞと取りかえては損だと考えて、布を取り返しにでも来
 ると大へんだ。」と思つて、後をも見返らずに、さつさと駆けて
 行つてしまいました。

五

若者は、下男げなんの姿すがたが遠とおくに見えなくなるまで見送みおくりました。
 それからその清水しみずで手てを洗あらいきよめて、長谷寺はせでらの観音かんのんさまの
 方ほうに向むいて手あを合あわせながら、

「どうぞこの馬をもとのとおりに生かして下さいまし。」
と、目をつぶつて一生懸命にお祈りをしました。

そうすると死んでいた馬がふと目をあいて、やがてむくむく起き上がろうとしました。若者は大そうよろこんで、さつそく馬の体に手をかけて起こしてやりました。それから水を飲ませたり、食べ物をやったりするうちに、すっかり元気がついて、しやんしやん歩き出しました。

若者は、近所で布一反の代わりに、手綱とくつわを買つて馬につけますと、さつそくそれに乗つて、またずんずん歩いて行きました。

その晩は宇治の近くで日が暮れました。若者はゆうべのよう

にまた布一反を出して、一軒の家に泊めてもらいました。

その明くる朝早くから、若者はまた馬に乗って、ぽかぽか出
かけました。もう間もなく京都の町に近い鳥羽という所まで来
かかりますと、一軒の家で、どこかうち中よそへ旅にでも立つ様
子で、がやがやさわいでおりました。若者はふと考えました。

「この馬をうかうか京都まで引張つて行つて、もし知つてい
る者にでも逢つて、盗んで来たなぞと疑われでもしたら、とんだ
迷惑な目にあわなければならぬ。ちようどこのうちの人たち
はよそへ行くところらしいから、きつと馬が入り用だろう。ここ
らで売つて行く方が安心だ。」

こう思つて、若者は、

「もしもし、安くしておきますから、この馬を買って下さいませんか。」

「いいました。するとそのうちの人たちは、なるほどそれは有り難いが、安く売るといつてもさしあたりお金がない。その代わり田とお米を分けて上げるから、それと取りかえつこなら、馬をもらつてもいいといいました。若者は、

「わたしは旅の者ですから、田やお米をもらつても困りますが、せつかくおっしゃることですから、取りかえつこをしましょう。」
とふしようぶしようにいいました。

「そうですか。では馬をはいけんしよう。どれどれ。」
と向こうの男はいいながら、馬に乗つてみて、

「どうもこれはすばらしい馬だ。取りかえつこをしてもけつして惜しくはない。」

「といって、近くにある稲田を三町と、お米を少しくれました。そして、

「ついでにこの家もお前さんにあずけるから、遠慮なく住まつて下さい。わたしたちは当分遠方へ行つて暮らさなければなりません。まあ、寿命があつて、また帰つて来ることがあつたら、そのとき返してもらえばいい。また向こうで亡くなつてしまつたら、そのまま、この家をお前さんのものにして下さい。ベつに子供もないことだから、後でぐずぐずいうものはだれもないのです。」

といつて、家まであずけて立つて行きました。

若者はほとんど拾い物をしたと思つて、いわれるままにその家に住みました。たつた一人の暮らしですから、当分はもらったお米で、不自由なく暮らしていききました。

そのうちに人を使って田を作らせて、三町の田の半分を自分の食料に、あとの半分を人に貸して、だんだんこの土地に落ち着くようになりました。

秋になつて刈り入れをするころになると、人に貸した方の田はあたり前の出来でしたが、自分の分に作つた方の田は大そうよくみのりました。それからというもの、風でちりを吹きためるように、どんどんお金がたまって、とうとう大金持ちになりました。

た。家をあげて行った人も、そのまま幾年たつても帰つて来
ませんでしたが、家もとうとう自分のものになりました。

そのうちに、若者はいいお嫁さんをもらつて、子供や孫がた
くさん出来ました。そしてにぎやかなおもしろい一を生をおく
るようになりました。

一本のわらが、とうとう、これだけの福運をかき寄せてくれ
たのです。

青空文庫情報

底本：「日本の古典童話」講談社学術文庫、講談社

1983（昭和58）年6月10日第1刷発行

入力：鈴木厚司

校正：林 幸雄

2006年7月28日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

一本のわら

楠山正雄

2020年 7月13日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>